

県立高校長及び中学校長からの意見聴取の概要

1 趣 旨

県立高校長及び中学校長に、探究科等新学科の設置及び課題探究型の学習やアクティブ・ラーニングの実施状況等について意見を聴取し、第2回以降の検討委員会における協議の参考にする。

2 概 要

- (1) 対 象 県立高校長及び中学校長 8名
 (2) 聴取期間 平成27年7月9日(木)から7月23日(木)
 (3) 聴取方法 高校改革推進室職員が対象校を訪問し意見を伺った。

3 主な意見聴取の内容(※高校のみの内容)

項 目	主な内容
(1) 学習指導上の課題	①生徒の学力の状況 ②生徒の学習に向かう姿勢(主体性等)の変化 ※③高大接続改革への対応、新テストへの懸念
(2) 学力向上の手立て	①学力差への対応、習熟度別指導の実施状況 ②上位層を伸ばす取組み
(3) 課題探究型学習の実施状況	①総合的な学習の時間の活用状況
(4) 課題探究型学習導入(実施)上の課題	①導入に向けた授業時数の確保 ②教員の負担増、多忙化への懸念 ③望ましい教員の研修体制や成果共有の手立て ④その他
(5) アクティブ・ラーニング、体験型学習の実施状況	①アクティブ・ラーニングの実施状況(グループワーク等) ②中高接続(公開授業、学習会、実験教室等)の実施状況
(6) 各種科学コンテスト等への参加状況	①参加の状況(校内の参加体制を含めて) ②指導体制(科学部の有無等)
(7) 探究科等新学科の設置	①新学科への期待と課題 ②その他

4 意見聴取者及び訪問日

(順不同、敬称略)

		氏 名	役職名	訪問日
県立高校	1	菅間 裕晃	山形県立山形東高等学校長	7月 9日(木)
	2	長谷川 賢	山形県立新庄北高等学校長	7月23日(木)
	3	岸 順 一	山形県立米沢興譲館高等学校長	7月21日(火)
	4	高梨 博実	山形県立酒田東高等学校長	7月16日(木)
中学校	5	佐藤 真人	山形市立第三中学校長	7月10日(金)
	6	富樫 誠	寒河江市立陵南中学校長	7月13日(月)
	7	大河原真樹	米沢市立第一中学校長	7月21日(火)
	8	加藤 忍	鶴岡市立鶴岡第二中学校長	7月16日(木)

5 意見の概要

(1) 学習指導上の課題

① 生徒の学力の状況

<高校>

- 少子化により、ここ数年で入学する生徒の学力差が急速に拡大している。上位層が少なくなる一方、下位層が多くなっている。(4校)
- 英語の学力低下が著しい。理数は学力に二極化が進み、数的推理の力不足が目立っている。(2校)
- 中学校との連携が大きな課題である。学力は高校段階から大幅に伸ばせるわけでもないので、中学校段階からビルドアップしていく必要がある。

<中学校>

- 英語の学力低下は全県的な課題である。良い授業を見せることが改善につながると思われるが、地区内に手本となる英語教員が少ない。(3校)
- 生徒の学力が二極化している。下位層に対して手がかかり過ぎ、上位層を伸ばし切れていない。(2校)
- 家庭環境に問題を抱えた生徒が多くなっている。生活のリズムが取れていない生徒も増えており、学習に影響している。

② 生徒の学習に向かう姿勢(主体性等)の変化

<高校>

- 学習習慣が身に付いていない生徒が見られる。高校に入学しても塾通いをし、頼り過ぎている生徒も多くなっている。(2校)
- 家庭学習時間は以前とあまり変わらないが、主体性に乏しく、出された課題をこなすことに注力している生徒も見受けられる。(2校)

<中学校>

- 学習塾に通塾している生徒が多くなっている。高校入試のみならず定期テストの分析まで行っている塾があり、生徒の学びに向かう主体性が失われているのではないかと懸念している。(2校)
- 居残り学習、家庭学習の支援、提出物のチェック等を通して、学習リズムづくりが必要である。
- 素直な生徒が多いが、自ら学ぶという部分はまだまだ足りない。

③ 高大接続改革への対応、新テストへの懸念

<高校>

- 新テストについては、文部科学省の動向を注視している。アクティブ・ラーニングには取り組む必要があるが、新テストについては、もう少し詳細な内容が明らかにならないと各学校は動けないだろう。
- これまでの指導事例の蓄積を生かしながら指導していくが、教科横断的な内容については対応が難しい。
- SSHの取組みは高大接続改革における新テストの導入にも十分対応できると考えている。その手法を普通科にどのように広げていくかが課題となっている。
- 新しい大学入試として、新テストの複数回実施が検討されているが、そうなれば、授業の進度を早める必要が生じ、学校行事にも影響が出るだろう。

(2) 学力向上の手立て

① 学力差への対応、習熟度別指導の実施状況

<高校>

- クラス一斉の授業では、学力差への対応に限界がある。課題も上位、中位、下位の各層に応じたものを作成し、指導しなければならない状況である。(2校)
- 進捗や学びの深まりの度合いに応じて、英語・数学で1年から3年まで習熟度別指導を実施している。
- 英語は3年で少人数指導、数学は文系理系も3年で習熟度別授業を入れている。
- 2年次以降では、英語・数学2クラスを3展開して授業をしている。1年次でも、英語は1クラスを2展開で実施している。
- 今年度から、1年生の数学で習熟度別指導を導入している。

<中学校>

- 習熟度別指導は、生徒指導上の問題もあり実施していないが、学力差に対応するために今後実施していかなければならないかもしれない。保護者の意向も反映させながら、希望制での実施であれば可能なのではないか。(4校)
- 高校入学後の学習活動を視野に入れると、中学でも、習熟度別指導の必要性を感じる。
- 現在ティームティーチングを実施している数学については、今後、習熟度別にしたいと考えている。一方、英語ではティームティーチングを実施したい。多様な生徒に対応するためには、教員が必要である。

② 上位層を伸ばす取り組み

<高校>

- 添削指導等で対応しているが、教員にとっては負担になっている。(3校)
- 難関大志望者をグルーピングして指導している。(3校)
- 志望別集会や個人面談等をきめ細やかに行っている。(2校)

<中学校>

- 上位層への指導は、現実的に長期休業中の補習以外取り組めない。
- 英語、数学では、単元のまとめの時間に、上位層は「発展学習」、中位層は「生徒同士の教え学習」、下位層は「教員が入っての指導」を実施する。
- 文部科学省の英語教育強化地域拠点事業の指定を受けており、英語の授業時間を増やしている。生徒の興味関心をベースにしながら、グレード別のコース設定も考えている。GTECを活用しながら3年間の英語力の推移を検証していく。

(3) 課題探究型学習の実施状況

① 総合的な学習の時間の活用状況

<高校>

- 1年生は総合的な学習の時間を活用し課題研究を実施している。理数科の2・3年生はSSHの教育課程の特例を生かし学校設定科目として実施している。普通科では進路学習でまとめ取りしている。
- 1年次に県の最上総合支庁と連携し、地域課題についてのグループでの課題探究学習を実施している。2年次に大学研究室訪問を絡めて、グループでの探究活

動から個人研究に移行し、進路志望に応じたテーマで課題研究を実施している。

- 一昨年、SGHに手を挙げた。1年生と2年生でグループでの課題研究を実施している。課題研究のテーマ設定にあたってはOBからの専門的なアドバイスももらって進めている。
- 総合的な学習の時間はまとめ取りをしており、時間割に組み入れていない。

<中学校>

- 総合的な学習の時間は以前に比べて減っており、職場体験などのキャリア学習やボランティア活動、特設英語（文部科学省の指定校）に充てており、教科横断的な課題探究型の学習活動を行う時間はほとんどない。（4校）

(4) 課題探究型学習導入（実施）上の課題

① 導入に向けた授業時数の確保

<高校>

- 職員研修会を実施し、教員の意識改革を図っている。今後、身につけさせるべき力、グローバル社会におけるリーダー育成などの必要性など、探究型学習やアクティブ・ラーニングの必要性を理解してもらうことが第一である。（2校）
- 週1時間、教育課程上で時数を確保できるようにしたい。
- 課題探究型の学習の成果を理数科のみにとどめず、普通科へも波及させていくことが今後の課題である。

<中学校>

- 教員により温度差がある。授業研究を頑張ろうとする教員もいれば、部活動に熱心な教員もいる。したがって、中学では研究主任の役割が大きい。
- これまでの学習指導よりも負担が大きい。全体的には課題解決学習にはそれぞれの教員が工夫しながら取り組み、従来の指導から一歩進めようとしている。
- 授業時数は以前と変わらないため、意識はしているが実践できていない。

② 教員の負担増、多忙化への懸念

<高校>

- 生徒全員が課題探究を実施しようとする、教員の確保が課題となる。学校全体が探究活動の負担感から、疲弊しないようにしないといけない。
- 理数科には加配があるが、普通科にはない。今後、活性化の観点から普通科での実施も視野に入れた場合、一人でも多くの教員を配置することが必要である。
- 現在の教員数だけでは負担が大きい。特に、理科等の専門教科の教員の複数配置が必要である。
- 課題探究は少人数でないと効果が期待できない。5クラス規模の進学校で、単位制も導入されていない状況では、探究型学習の推進に困難が予想される。教員の加配が絶対に必要である。
- 多くの進学校は文武両道のもと、活発な部活動を展開しているが、学校規模が小さくなるにつれ、教員、生徒とも部活動の負担は大きくなっている。

<中学校>

- 多忙化については、部活動指導がネックになっている。部活動に対する保護者の期待は大きくなっていると感じる。

- 小中規模校では、探究型学習を実施するには教員数が不足している。
- これまでも探究型の要素を含んだ授業が展開されており、改めて負担感や多忙感を感じない。

③ 望ましい教員の研修体制や成果共有の手立て

<高校>

- 実際に実践している先行事例を学ぶためにも、先進校視察が必要である。先進校視察と校内研修の充実を柱にしたい。(3校)
- 多くの教員を研修に行かせたい。何人かの教員の核が出来ると急速に普及していくと考える。
- 若い教員を集めて研修会を実施しながら、実践活動を活発化させ、すべての教員に成果を還元するような仕組みがあるとよい。
- 県が主導して一斉に研修を行うべきだ。教員の意識改革、スーパーティーチャーの授業公開、自分たちが取り組んできたことに対する研修と成果の共有、いい教材の選定とそれをいかに教えるかの研修が必要である。

<中学校>

- 公開研究会等を通じて研修を深め、成果を共有する。(2校)
- スーパーティーチャーを発掘する。また、他校の力のある教員の授業を見に行かせるという取組みを進める。(2校)
- 互見授業を、必ず一人1回実施し、互いに授業を見せ合う。
- 官制研修はブラッシュアップの役に立っているのか疑問を感じる、研修内容の改善が必要である。

④ その他

<中学校>

- ICT環境や実験器具などの整備が必要である。現在あるもので対応するとすると、探究テーマが限られてしまう。

(5) アクティブ・ラーニング、体験型学習の実施状況

① アクティブ・ラーニングの実施状況（グループワーク等）

<高校>

- 職員の意識も変わってきている。ジグソー法やグループ学習などを取り入れながら、主体的な学びを展開している教員もいる。(4校)
- 社会や理科など科目を一人で担当している場合は導入しやすいが、複数で担当している場合は合意形成が必要となり、難しさを感じる。
- 本来、アクティブ・ラーニングは主体的な学習に授業を改善するための手立てであるはずだが、形だけが先行するだけの学習にならないかと危惧している。

<中学校>

- グループワークなどは必要に応じて、各教科で導入している。
- アクティブ・ラーニングの実施には教材研究の充実と時間の確保を図る必要がある。
- 授業の持ち方について、1つの教科を複数の教員が担当したり、一人の教員が複数の学年を担当したりすると、学習進度もあり導入しにくい面がある。単元に

よっては、学期に1～2回の実施が現実的などころでないか。

② 中高接続（公開授業、学習会、実験教室等）の実施状況

<高校>

- 中高連携の重要性は認識しており、連携の機会を増やすべきだが、公開授業等に互いに多くの教員を参加させるのは現実的には難しい。（2校）
- 英語の学力低下が深刻であるが、例えば高校が地元中学校と連携し、高校一年段階での学力の状況を共有する機会があってもよいのではないか。
- 中学生向けの学習会を高校で実施する。9月は5教科の講座実施、12月は国数英3教科の講座と、すべて英語による課題研究発表会を見せたいと考えている。

<中学校>

- 2年前、中高連携事業で指定を受けた際に、互見授業を計画したが、行事等が合わず、なかなか見られなかった。年間行事検討の段階からすり合わせを行わないと実際の実施は難しい。
- 公開授業の案内を高校にも出している。以前に比べて、高校教員が中学校の授業を見る機会は増えているが、特に中高の英語科同士の連携の必要性を感じる。
- 高校の授業の様子を見る機会があるのはよい。高校側から授業を見せて欲しいとの申し入れも何度かあった。県英研絡みで何度か授業は見ている。

(6) 各種科学コンテスト等への参加状況

① 参加の状況（校内の参加体制を含めて）

<高校>

- 国際大会の国内予選への参加状況は、教員の勧めによるところが大きい。探究科の設置で芽が育つのではないか。
- 理数系の科学オリンピックには希望を募り、事前に指導を加え参加している。人文・社会科学系のコンテストへの参加はない。
- 参加していない。（2校）

<中学校>

- 科学の甲子園ジュニアへの参加まではなかなか進んでいない。学校祭での発表のレベルにとどまっている。顧問の指導力によるところが大きい。（2校）
- 自由研究への取組み、科学フェスティバルやモバイルキッズへの参加のレベルにとどまる。
- 参加の状況はない。

② 指導体制（科学部の有無等）

<高校>

- 科学部はあるが、顧問が他の部とかけ持ちをしている。一人でも専属で顧問をつけることができれば、科学コンテストにも参加できるのではないか。
- 科学部、数学部の生徒たちを中心に取り組んでいる。
- SSクラブ、コアSSクラブ、城戸淳二塾のメンバーが中心となっている。
- 科学部はあるが、出場できるほどのレベルでない。

<中学校>

- 理科部や科学部の設置はない。トップ層は理科部、科学部というイメージはな

い。中高一貫教育校やSSH指定校で実施するならともかく、一般の中学校では入る生徒もいない。教員配置の余裕もない。(2校)

- 山形市内では5校にしか科学部がない。

(7) 探究科等新学科の設置

① 新学科への期待と課題

<高校>

- 従来の理系・文系の枠にとどまらず、探究活動を通して考える力や工夫する力、他と意見交換しながら練り上げ、よりよいものを作り上げようとする力を醸成しながら、今後の日本をけん引する人材は育て上げなければならない。
- 地区内の中学生の上位層の相当数が高校入学段階で他地区に流れている。探究科やコースの導入により、この層の中学生を残せるのではないかとの期待がある。
- 生徒を更に伸ばせる素地として、学校側が新学科をどう使うかは今後更に研究する必要がある。(2校)
- 探究科の設置の意図を中学生、保護者にきちんと伝えることが重要である。探究科は、いろいろなことを調べたり、探究したりすることによって学習内容が深められ、結果として、いい成果が得られそうな学科だと映るかどうかだ。
- 探究科の魅力をどのように見せていくか。海外研修など、少し夢のある学科に見せていく必要がある。
- 1年次生から、別のカリキュラムで難関大志望者層を指導できた方がよい。
- 中学校の段階での文理選択は難しいだろう。文理混合のクラスにできれば対応できる。
- 併願を認め、探究科を希望したが、不合格だった者は普通科の基準を上回れば合格できる仕組みにすべきである。
- 1年生での成績を加味して学科分けしてはどうか。学科別に分けて募集した場合、少子化が著しい地域では合格の最低点が大差ないという状況になるだろう。
- 理数科でも生徒はなかなか集まらない。魅力の出し方が課題である。
- 生徒募集等の運用面は学校ごとに違っていてもいいのではないか。

<中学校>

- 普通科との違いは何なのか、探究科のコンセプトについて、生徒・保護者に丁寧に説明する必要がある。(3校)
- 中学生の積極的なチャレンジを促すためにも、普通科と探究科の併願を当然認めていくべきである。また、2年の段階から学科を選択したりできるなどの柔軟な制度を検討すべきである。(3校)
- 探究科の定員については、地区内の中学生の数を考慮し、2クラスにするか1クラスにするかを考えた方がよい。
- 推薦入試については、一部の高校の志願者以外は、中学生が学習すべき時に学習しない状況に陥り、学力低下につながった。探究科を設置する場合、専門学科になると思われるが、推薦入試なしで生徒を募集してもらいたい。(2校)
- 探究科の設置に当たっては、県内の複数の地区への設置を検討して欲しい。村山だけでなく、庄内、置賜にも難関大を目指せる学科を設置して欲しい。

- 中学校段階での成績上位層を高校で集中させて伸ばしていくといった思い切った措置も必要である。
- 高校側の進学指導に関する危機感はあるが、中学校段階での進路指導についての様々な考えから、県立高校に特進科的な構想は必要なのかとの意見が出ることも想定される。
- 基礎学力が高い生徒に選択してもらいたい。そのためには、探究科のカリキュラムを中学校3年の生徒がイメージできるかが課題となる。

(8) その他

<高校>

- 各種の研修について、小中高バラバラに実施しており、一貫性がない。課題を共有するために、小中高を通じた地域の研修体制が必要ではないか。
- 単発の研修では成果が上がらない。現在実施している中高連携事業より、本校とより近隣の中学校とセットにして研究した方がよい。

<中学校>

- 中学生の学力低下については、業者テストの廃止も影響しているのではないかと。つまり、生徒はいわゆる自分の立ち位置が分からなくなっており、教員は生徒がつまづく分野を把握しきれていないのではないかと。
- 論理性や数学的な思考力に極めて優れる子どもがいる。このような子どもたちが、伸びていける環境をつくることも重要である。